

「文化変化と文化変容」テレビ試作番組

スノーモービルで猟にでかけるエスキモー。エスキモーのトレードマークであった犬ぞりは、今日アラスカのどこにも見られない。1976年にアラスカのノーススロープで石油の生産が開始されてから、エスキモーの社会に急速にアメリカの車文化の波が押し寄せた結果である。

狩猟の形が変わると同時に、生活文化も大きく変わっている。伝統的な家はモダンなアメリカ風の家になり、生肉は料理して食べるようになった。エスキモーの生活文化が、外来のアメリカ文化によって変わった。このような現象を、「文化変化」，「文化変容」という。

ここはニューギニアの高地住民の集落である。1960年代にコーヒープランテーションが開発されたが、それに伴ってアルコールを飲む文化が入ってきた。その結果、賃金をすべてビールにかえて飲み続ける、ビール愛好者がふえた。



アルコール文化が入った結果、それによる新しい社会問題として犯罪やけんかが急に増加した。これは、今までなかった新しい文化との接触によってそれまでの生活様式が変わり、新しい文化が生まれたと考えてよい。こうした現象を「文化変化」，「文化変容」というが、きょうは、昔の生活の記録が残っている日本のある集落を訪ね、文化変化，文化変容について考えてみよう。

訪ねる村は、ほぼ日本の中央に位置する栃木県栗山村。群馬県と福島県に接して、利根川の水源に近く、関東の屋根である。香川県のほぼ4分の1の面積を持つこの村は、人口およそ3,000人、村の90%が森林で覆われ、それを貫く多くの谷川はダムに利用されている、いわば森とダムの村である。谷間に点在する集落の一つ、土呂部が目指す目的地である。



祖父江孝男

31戸の家とそこに住む120人の人々の数はここ20年間ほぼ一定しているが、生活様式は大きく変わってきた。

一見してわかることは、カヤぶきの屋根が消えて、新しい家々が建っている

ことである。

では、昭和34年のこの集落の生活を振り返ってみよう。

カヤの屋根の建ち並ぶ土呂部，村の生活は山仕事と畑仕事に支えられていた。馬は農耕に，そして物資の運搬になくてはならない家畜であった。どこの家でも，家族同様に飼われていた。



畑仕事は主に主婦に任されていた。女たちは，朝早くから夕方暗くなるまで働き詰めに働いた。畑仕事の合い間には，林道工事の賃労働にも出た。土呂部の人は日本一の働き者だと言われたが，そうでもしなければ食べていけなかったからである。

山林に囲まれたこの集落では，山仕事が男たちに任されていた。国有林の伐採や間伐は，重要な収入源であった。

一方，炭焼きが，中心となる産業であった。標高1,000メートルに広がるこの地では冬の訪れも早く，秋の10月から翌年の5月まで，1年の4分の3にわたって炭を焼くことができた。危険の多いこの労働も，エネルギー革命によ

って次第に姿を消していく運命にあった。

子供にできる仕事といえば、水くみぐらいである。飲料水は集落の中心を流れる川からとった。

一方、燃料は周りの山からとれる薪であった。かつてすべての山村がそうであったように、人々は何の疑いもなく自給自足の生活を送っていたのである。

夜なべには炭俵がつくられた。

家族全員の労働によって支えられていた生活の中で、唯一の楽しみは食べることである。いろりを囲んでの食卓には、野菜のおかずと、ヒエやアワを中心としたご飯が並んだ。

子供は遊びの天才である。自然に囲まれた土呂部の子供たちの友達、川であり、山であった。水の冷たさも、子供にとっては何でもない。秋のアケビとり、そして冬のスキー、みんなで遊ぶ子供の姿の中に、子供社会の秩序が自然に形づくられていく。



栗山小学校土呂部分校，明治以来80年の歴史を持つ。昭和34年には31

人の子供が二つのクラスに分かれ、二人の先生と一緒に勉強していた。いわゆる複々式学級である。

この土呂部に入ったテレビ第1号は、土呂部分校である。閉ざされた村に、外の新しい文化が入ってくるきっかけとなった。そして、子供たちがまず変わった。変わっていった子供の姿は山の分校の記録としてテレビ番組化され、残されている。この映像は、その一部である。

外に向かって開かれつつあった子供の目とは裏腹に、集落の生活はそう変わらなかった。例えばけが人が出ると、河原を通して村の中心の医者へ運ばなければならなかった。川の一部が道だったからである。

8月の高原を渡る風はさわやかである。この時期は高原大根の収穫期、土呂部の人は総出で大根の収穫に追われる。

6月1日に一斉に種をまき、そして8月に入ると一斉に収穫にかかる。村落共同体としての生活は変わらなくても、生産様式や生産物は大きく変わった。



私たちは土呂部の文化変化、文化変容を、まず大根づくりの導入過程の中から見ていくことにしよう。

（女の子）私たちの部落では炭焼きばかりしていますが、炭焼きは危険が多いわりに利益が少ないとすれば、何かほかの仕事を考えなければなりません。大根はこの地方でも大変よくとれますから、畑は少ないが、収穫は多いのではないのでしょうか……。

（中年男性）ソバとか大豆とかヒエ、アワとかって、そういうふうなものが作られていた。それに代るものとして大根を入れるというときに、部落で、県の関係の協力も得ながら座談会みたいなものを開いたんですね。夜ね。そんなときに、大豆など穫れないということですね。大豆っていうのはその原料なんですけど、みそ作ることできないよとか、そんな大根なんか作ってどれだけ金になるものかわかんないのに、そのようなものを作ればみそできなくなっちゃうよ、みそどうすんだんべいというような話なんかもあったということを、よく記憶してるんですが、そんなふうな中で、大根そのものをここでやろうやというふうな雰囲気になるのにも、農家それぞれのいろいろな——それまで長年畑でいろいろやってきた。それが一大変革というふうな形になるという時でしたから、当然といえば当然かもしれないですけども、そんなふうな話があったということですね。

もう一つ、ここの地区、これは栗山全体そうかもしれないんですけども、やろうかという時には、一人なら一人だけで取り組むんだっていうふうなことでなしに、地域ぐるみでやるんだというふうな、そういう一つの進め方っていうのがあるんですね。ですから、一人や二人というふうなことだけでまずスタートするんだっていうことじゃなくて、やるからには、じゃ地域こぞってやろうや、と。ですから、いってみればこの土呂部地区、そういう地域全体がまとまった上でっていうふうなことが一つの基本ということで、あんまり自分勝手に、おれはこっちだよ、おれは違うよというふうな感じじゃなくというふうな色彩が強いところだと思うんですね。

明らかに土呂部の大根栽培は、ほかの集落との文化接触によって導入されたものである。そして新しい文化——ここでは大根づくりだが——を受容する過程で起こるさまざまな摩擦も見ることができる。

1日1戸で2,000本の大根を収穫、水洗い、乾燥、箱詰め、そして出荷する。大根は、出荷経費を節減するために協同生産組合をつくり、10トン・トラックを雇って送り出している。

1日4,000箱から5,000箱の大根が東京に向けて出荷され、土呂部の農業収入の半分を賄っているのである。

土呂部の変化を象徴するもう一つの現象は、観光事業への進出であろう。

栗山村は古くから多くの温泉場があり、年間20万人に上る観光客が訪れる観光地でもある。しかし、観光資源の乏しかった土呂部では、道路が開かれた昭和40年の中ごろまでは、観光事業に目を向ける人はいなかった。

とはいっても、栗山村のほかの地域の成功に刺激され、素朴な田舎の味と恵まれた自然を生かした観光事業に進出すべきだという人も次第にふえてきた。



(祖父江)こちらで民宿を始められたのは、それはいつになりますか。

(民宿の主人 齊藤五一郎さん)えーとね、今から13年前だから、48年ごろだと思うんですけど。

(祖父江)ちょうど分教場がなくなったのは49年ですが、その少し前?

(民宿の主人)あ、そうだね。1年前。

(祖父江)1年前。ここでは一番最初の民宿ということで、村のほかの方々はやっぱり、珍しいことをやるってというような、そんな感じですか。

(民宿の主人)村の人たちはここに昔から住んでいる人で、山とか畑持ってるから、一応高原大根をやるとか、それから、採草地持ってるから、飼料をとって牛を飼うとかってというようなこと、できたんですよ。ところが、おれらの場合、私はここで生まれたんですけども、お父さんが他地から来たもので、ここに住みついたもんですから、そういった山や畑がないから、何かここで生活していくのには、民宿かなんかやんなくちゃ生活していけないんじゃないかということで始めたんですよ。

(祖父江)やはり最初はいろいろ、始めるまでの苦心といいますかねえ。

(民宿の主人)結局、当時民宿組合っていうのも設立して、いろいろ、どういうようにやったらいいってというような、今市保健所の人たちが指導してくれたんですわ。

(祖父江)ああ、そうですか。

(民宿の主人)まあ、開店したけれども、お客さんは来る、まだなれないから、本当に初めのころは苦心したですよ。

(祖父江)ああ、でしょうねえ。

(民宿の主人)お客様を扱うのにね。

(祖父江)ええ、ええ。すべてが初めてですからね。

(民宿の主人)はい、すべて初めてですから。

(祖父江)最初のころ、お料理を、例えばご飯出すとか、そういうときも大変だったでしょう。

(民宿の主人) 大変だったですわ。だから、うちの女房は最初のころはほんとに、お客様が来るとにがい顔してたんですよ。

(祖父江) ああ、そうでしょうねえ。いろんなものやなにか全部背中にしょってきた時代があったとか。

(民宿の主人) ええ、ありますわねえ。

(祖父江) その道路のつく前っていうのは、やはり馬も通らないような時代っていうのがあったわけですね。

(民宿の主人) あったですねえ。川へはまだ橋ができなかったもんですから、石を並べておいて渡って歩ったりして。

(祖父江) そうですか。そうすると、大体外へ出るときはずっと歩かなきゃなんなかったわけですねえ。

(民宿の主人) そうです。もう徒歩以外ないですねえ。

(祖父江) そうすると、今度は道路がついて、歩かないでも済むようになってきたのはいつごろですか。

(民宿の主人) 昭和 32 ～ 33 年のころだと思うね。

(祖父江) ああ、そのころ道路が。

(民宿の主人) 舗装ではなかったけども、砂利道で、何とか車が走るように。

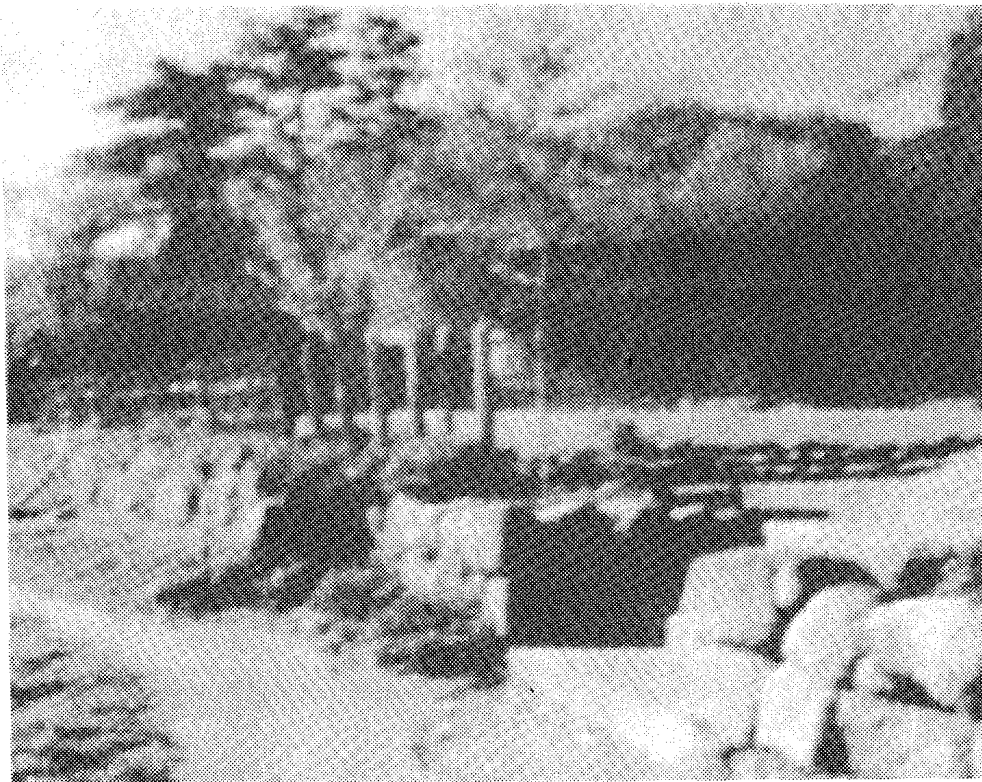
(祖父江) はあ、はあ。

道路の整備も、閉ざされた土呂部を開かれたものとしたことは確かであるが、生産手段としての土地を持たなかった斎藤さんが文化受容に積極的であったことは、注目に値する。

観光事業に関しては土呂部全体の文化変化とは言いがたいが、しかし、栗山村のほかの地域の文化の受容であり影響であることは、事実である。

かつて子供たちの歓声に包まれていた栗山小学校土呂部分校は、今はない。分校跡には夏草が茂り、遊具が残されている。この分校の廃校は、土呂部の

生活の変化を示す大きなエポック・メイキングな事件である。



（元・土呂部分校校長）式辞。春光うらかな本日，ここに土呂部分校の
廃校式を挙げるに当たり，一言所感の一端を申し上げます。



文明文化の驚異的飛躍とともに、教育の伸展もまた想像を絶するものがあります……。

（インタビュー）

（祖父江）先生がここへいらっしゃいましたのは何年になりますか。

（元・分教場教師 柏倉トミさん）42年だったと思いますけど。



（祖父江）ああ、そうですか。来られたときの第一印象といいますかね、それはどういうふうだったでしょう。

（元・分教場教師）PTAの会長さんが村回りをしてくれたわけです。1軒ずつ。そのときに、昼間はみんないませんから、夕方暗くなってから1軒1軒回って連れて歩いてくれたんですけど、それでも奥さんたちはいなかったですよ。みんな畑行ってて。そして、だんなさんが夕飯の用意をしてました。

（祖父江）ああ、そうですか。

（元・分教場教師）そのころは電気なども暗くてですね、せっかく回っていても顔が見えないくらい。それを一番感じましたよ。

（祖父江）ああ、そうですか。今はもうどこの家でもみんなトタンの屋根で、大変きれいになっておりますけど、草屋根、カヤぶきだったわけですねえ。

（元・分教場教師）はい、全部。

（祖父江）そうすると、大体ここで大きく屋根が変わり始めたっていうのは、これはいつごろになりますか。

（元・分教場教師）12～13年前でしょうか。

（祖父江）12～13年前というと、この分教場がなくなったのは先ほどのお話で49年ですか。その前ですか。

（元・分教場教師）から、ぼつぼつ。

（祖父江）ぼつぼつねえ。

（元・分教場教師）この村はみんなやっぱり団結するっていうか、何ていいますか、1軒でやるとみんなやるんですね。

（祖父江）はあ、はあ。

（元・分教場教師）そのころから高校などもみんな行き始めましたから、友達など連れてきたときに、子供が肩身の狭い思いをするとかわいそうだからって言って、そんなふうなことでも家を直し始めましたね。

（祖父江）ああ、そうですか。先ほどのお話では、ちょうど来たときにまだ電気が大分暗かった、と。

（元・分教場教師）暗くって、電気料がまあ、もったいないっていう、昔のランプ生活がまだ残ってたんでしょうねえ。

（祖父江）そうですか。電気がやはり明るくなってきたのは、いつごろですか。

（元・分教場教師）いい家ができてから。

（祖父江）ああ、そうですか。そうすると、道路、家、それから、いわゆる電化製品といいますか、そういうふうなものがやっぱり大きな変化ですねえ。

（元・分教場教師）そうですねえ。

(祖父江)それで今度、昔の子供さんたちですね、ここのね。先生来られたころの印象として、どうだったでしょう。

(元・分教場教師)昔の子供は一生懸命働く。今の子供は全然勤労意欲っていうのがないんですよね。こういう草むしりでもなんでも、全然。ここもむしったんですけど、子供にやらせろなんて村の人言いましたけど、今の子供はもうお坊っちゃん嬢ちゃんだから。

(祖父江)ああ、そうですか。

(元・分教場教師)ええ。もう都会の子供と同じです。

(祖父江)同じですねえ。

(元・分教場教師)昔はもう、汗水たらして働くの平気でしたよ。

(祖父江)子供の遊びなんかも、もう随分違うわけでしょう。どうでしょう。

(元・分教場教師)ええ、全然違いますね。昔の子は、春先からカジカの卵とりから、それからあと今度魚を手でとるカジカとりとかイワナとりとか、とったり、それから、夏のころはキノコとりとか木イチゴとりとかねえ。山遊びしたり、それから、山菜とり、アケビとり——アケビこんなにここへいっぱい入れてね。私によく持ってきてくれましたけど、今の子はそういうことしませんね。

(祖父江)全然しないんですか。

(元・分教場教師)川遊びもしませんね。

(祖父江)はあ。もう川へは入らないんですかね。

(元・分教場教師)もう今の子は、山も知らないんじゃないですか。どこに何があるなんていうことを。

(祖父江)ああ、そうですか。それで、その代り何をしてるわけでしょう。

(元・分教場教師)やっぱり家の中で漫画読みとか、テレビつけたり。

(祖父江)それから、ファミコンなんかとか。

(元・分教場教師)ええ。それから、今は各家庭っていいですか、小さい

女の子のいる家ではピアノなども。

（祖父江）ああ、そうですか。ピアノはいつごろから？

（元・分教場教師）ピアノは、そうですねえ、4～5年でしょうか。

（祖父江）ああ、今から4～5年前。というと、50年代の終わりごろ。



（元・分教場教師）そうですねえ。

（祖父江）やっぱり子供たちも随分変わったんですね。

（元・分教場教師）子供の数も少なくなりましたしね。あとは自転車で乗り回すとかね。そういう自然の遊びというのは、なくなりましたよね。

（祖父江）それから、今、衣食住と考えると、食生活なんかもそうですねえ。

（元・分教場教師）食生活もうほんとに、昔と考えたら全然違います。

（祖父江）はあ、はあ。それはどういう点、特に違いますか。

（元・分教場教師）やはり、何ていうんですか、インスタントものですか、そういうものも大分入ってます。今の若いお嫁さんなんかはね。昔は小豆煮て、あんこつくってだんごつくったりしましたが、このごろは缶詰の

あんこの方が早いなんていって、それで間に合わせる家もありますね。

（祖父江）ああ、そうですか。そういうインスタント製品やなんかの買う場所ですけど、それはどこで買うんですか。

（元・分教場教師）週1回、土曜日に今市の農協が来るようになったのでとても助かります。

（祖父江）車で来るわけですね。

（元・分教場教師）ええ、車で。それはわりあい明るいうち来るんです。明るいっていても5時ごろですからいいんですけど、あとの売り屋さんは、あと2軒入ってますけど、真っ暗にならないと、8時ごろにならないと来ないんですよ。だから私も来て、うちから出だして買いに行くの。雪だの降ると……。ほとんど農協だけで、土曜日に1週間分をためて買ってます。

分校の廃校後、土呂部は大きく変わった。多くの人々が語るように、家が建てかえられ、生活が都会化していった。

暗かった台所はキッチンと名を換え、明るいものになった。食べ物も、自家生産の野菜から、卵やハム、チーズといった加工食品が多くなった。

燃料は薪からガスへ、そして小川から汲んでいた生活用水は水道からと変わった。

電気冷蔵庫や電気炊飯器は生活文化の電化を示す主人公であるが、電気冷蔵庫、テレビ、電気洗濯機が三種の神器として登場した昭和30年代の後半から40年代にかけて、土呂部も大きく変わったのである。

いろりは姿を消したが、一家団らんの朝食の形は変わらない。この家のように4世帯が一つの屋根の下に住む生活形態は、土呂部にはまだ多く残っている。家族に対する考え方は、物質文化の変化ほど大きくないのであろうか。

（農家の主婦）ヒエのご飯食べたりさ、ジャガイモ食べたり、カボチャ食べたりさ、トウモロコシ食べたりさ、今みたいにやっぱり……。昔のこと



考えると、今はほんとにもったいなくてしょうがないですよ。全然今は、昔と食べ物まで変わっちゃったからね。ヒエだのキビとかアワとかね。昔はね。畑耕して、畑でつくったんですよ。今は全然そういうのはつくらないんです。ソバもつくらないしね。ソバもつくったんですよ、昔はね。
(祖父江) うん、うん。

土呂部の人口はここ20年間120人で横ばいであるが、子供の数の減少には目を見張るものがある。

現在スクールバスで村の中心の小・中学校、保育所に通う子供の数は、保育所5人、小学生6人、中学生3人のわずか14名である。土呂部分校が廃止された昭和49年に20名いた小学生は、廃校後の昭和51年から急速に減り、ここ4～5年の間は5名から6名の間で安定している。出生率の低下は、文化変化の一つであろうか。

子供の登校した後、その父親たちの出勤である。20代から40代にかけての若い世代は、ほとんどが賃金労働に従事している。

一方、50代以上の世代が農業を受け持つという労働の分化が、土呂部では目立つのである。

朝8時、通勤の車が村の中心へ向かって走り去っていく。

ここ栗山村では、若者の雇用対策と産業振興という二つの面から、新しい産業の開発に努めている。その一つが木工場である。豊富にある木を原料にして木の持つ温かみを製品に生かそうと取り組んでいる。

こうした地場産業は山菜加工工場やセメント工場など10社あるが、いずれも従業員が10人程度の小規模工場である。

塗装係の村上さんは、小学生のころテレビの教育番組「造船所」に感動し、木の船をつくった少年である。全く船を見たこともない少年が映像を通して船に興味を持ち、船をつくったという事実は、文化の伝達や変化に果たすテレビの役割の大きさを知らせてくれる。

(インタビュー)

(民宿の主人)一番困るというと、ここで現金収入、要するに働く場所が少ないってことですよね。苦心して高等学校で教育させても、都会へ出て帰ってこないっていうケースが出てきたってことですよ。

(祖父江)これはどこでも、村っていうと共通の悩みみたいですねえ。

(民宿の主人)そうですねえ。

50代以上の世代が農業に、そして若い世代が賃金労働に従事するという労働の分化は、技能の習得や文化受容の柔軟さに由来しているように見える。例えばこのような道路工事でも、現在ではショベルカーの運転という技能を必要とする。技能習熟においては、若者に老人は負かされてしまう。石垣の目地塗りが女性であることも、同じ理由である。道路工事一つとっても、私たちは世代間の文化受容について考えさせられるのである。

高冷地大根と並ぶ生産物は、肉牛である。土呂部の家々では、物の運搬や農作業のために馬を飼っていた。したがって、牛の受け入れにはさほど抵抗がなかった。

牛が飼われ出したのは昭和42～43年ごろであるが、最初は母屋にくっついて馬小屋を使用した。しかし、衛生上の問題と飼育頭数の増加によって、現在は専用の牛舎で飼っている。

夏の間は、土呂部の牛の飼育頭数の80%に当たるおよそ130頭が、山の共同牧場に放牧される。土曜日の早朝、山の放牧地は大にぎわいである。というのは、この日が1週間に1度のえさやりの日だからである。

土呂部では春に生まれた子牛を翌年の春に出荷する育成牛飼育方式をとっているので、お正月早々、子牛とのつらい別れが待っている。子牛の値段は、24万円から25万円とのことであった。

大根の収穫が終わると、楽しい祭りがやってくる。土呂部の人が一番沸き立つときである。3日3晩続くこの祭りには、勤めている若者も休暇をとって参加する。むしろ、若者が先頭に立って祭りを運営しなければならない。牡獅子、雌獅子、太夫で構成する伝統的な獅子舞は、体力の強い若者に受け継がれてゆく。老人たちや村の指導者は、祭りを支える裏方のように見える。活動の主役は若者である。



伝統的民俗芸能や祭りは、生活様式の変化とは無関係に継承されていくのであろうか。変わるものと変わらないものの二つの文化が、調和して受け継がれていく。

（インタビュー）

（祖父江）お祭りなんかはやはり、昔ともうほとんど変わらない……。

（民宿の主人）ほとんど変わりなく、協力し合ってやっています。

（祖父江）ああ。若い方でも、お祭りについての関心といいますか、それはあんまり変わらないんですか。

（民宿の主人）変わりないですね。これは厳しくおつき合いさせられていますから、昔から、不付合いですと、前は酒1升とか酒1斗とかって買わせられたそうですよ。

（祖父江）はあ、はあ。

夜になると、人々は昼間とは違った顔を見せてくれる。昼間が形の整ったハレの舞台だとすれば、夜はくつろいだハレである。

老若男女が一体となって、夏の一夜を楽しむ。

満ち足りた土呂部の人々の顔から、私たちは、受け継がれつつも少しずつ変わっていく文化の足音を聞くことができるように思える。

文化変化と文化変容の姿を土呂部の人々の生活の中に求めてきたが、老人は昔を振り返り、そして今の生活について次のように述懐する。この老人の言葉を、私たちはどう考えていったらよいのであろうか。

（インタビュー）

（農家の主婦）大変だったですよ、昔は、ほんとに。今は全く、昔のこと考えると、何て言っているんだかわかんないですよ。ほんとにありがたくなってねえ、もったいなくてしょうがないですよ、今はね。

（祖父江）うん、うん。

（農家の主婦）山へ入って炭焼いたりさあ、俵編んだり、縄ハアなったりしてさ。やっぱり昔の人は、仕事ばかりやってたんですよ。今の人と正反対ですよ。今の人はもう、学校出なくちゃ、教育しなくっちゃっていう人、昔の人はそれがないからねえ、やっぱりね。仕事ができればいいと思ってたんじゃないですか。

（祖父江）うん。

（男性老人）今の人たちはまあねえ、体はさほど骨折らずに楽に生活すると思います。その当時は、我々ですとヒエのご飯ですね。お米の中へヒエを耕作しておって、ヒエをとったのを入れて、そしてそれを主食にしました。こわかったですよええ。



（祖父江）うん。

（男性老人）それがために、炭焼きにはやっぱり、女衆を相手にしてやってきましたから。私たちが炭焼くと、それを婦人の人たちが2俵から3俵くらいずつ背負って、この車の通る場所まで小出しというのをやったんです

よ。

（祖父江）うん。

（男性老人）今はやはりいろいろな仕事を見つけて、それで収入を得て働いていますけれども。それがために夏大根などもつくったり、それから、牛飼い、そういったので現金収入の道を考えてやっておりますが。

（祖父江）うん。

（男性老人）昔の生活から見ると、今の生活はずっと楽だと思いますわね。金がかかりますが、楽だと思います。